

知財情報を奏でる交響楽団

会誌広報委員会 委員長

高井 浩太郎 氏

(所属：浜松ホトニクス株式会社)



interview

自己紹介

契約、渉外（M&Aも含む）、子会社管理を中心に、「知的財産が関係するならば自分の業務範囲内だ」をモットーに会社の事業をサポートしています。

紙の新聞の購読を再開しました。新聞は朝刊と夕刊という一つのパッケージで情報量が限定されているため、本来は興味のない内容にも触れる時間が生まれます。この時間が貴重だと感じます。

Q 会誌広報委員会とは？

会誌広報委員会は JIPA の機関紙である『知財管理』誌及び広報誌『季刊じば』の企画・編集を担当し、会員へ知財実務のための情報を発信しています。3つの小委員会で論説の企画提案と原稿の査読結果を審議し、定例委員会で企画提案の承認と『知財管理』誌の編成計画を審議しています。

第1小委員会…東日本・海外の会員企業・賛助会員所属の委員で構成

第2小委員会…西日本の会員企業、賛助会員所属の委員で構成

第3小委員会…少数知財企業所属の委員や知財業務経験が浅い委員を中心に構成

『知財管理』誌の原稿の約6割は、会誌広報委員会のメンバーが企画した論説です。各委員が知りたいことや学びたいことを企画し、有識者と面談をして執筆の依頼をします。執筆いただいた論説を査読した上で、『知財管理』誌に掲載しています。特集号（10月号）は、メインテーマを決めてそれに沿った論説を全て会誌広報委員会が企画しています。初回の検討から発行まで1年以上の時間をかけて全委員が粘り強く取り組んでいます。

Q 委員会の特長/魅力は？

特長

特定の法域、国・地域、業種に限らず、出願権利化、秘密保持、契約、紛争、知財戦略など多様なテーマを扱っていることです。メンバー構成も20代の若手からベテランまで幅広く、少数知財部員から大規模知財部員、さらには国内外の賛助会員も参加しています。多様なバックグラウンドを持つ委員が活発な議論や意見交換を行うことで、様々な企画がブラッシュアップされると共に、委員一人一人が新たな視点や知見を得ることができます。実務経験が少ない読者の興味関心を考える上では、知財担当数年

目の委員の意見も大変貴重となります。私たちは、知財情報を奏でる交響楽団であると自負しております。委員それぞれが奏でるメロディーが重なり合い、『知財管理』誌、『季刊じば』という一つの作品をつくり上げています。

小委員会と定例委員会の月2回の会合で集まって議論をするだけでなく、有識者との執筆面談への希望者の参加や委員会後の懇親会、宿泊を伴う定例委員会があることで、委員同士のコミュニケーションを活発化できています。委員の相互理解が進むことで、この仲間とであれば何とかできるという自信が生まれ、毎月の『知財管理』誌と毎四半期の『季刊じば』の発行を継続できています。

魅力

執筆面談やインタビューを通じて、著名な有識者やJIPAの理事など、様々な方と直接話す機会があることは大きな魅力です。面談を通じて、原稿には載せられない、貴重な話を聞くこともできます。

多様な委員が参加しているため、自分の所属組織にはいないタイプの人に出会い、会誌広報委員会の業務に共に取り組むことができます。自分にとってのロールモデルを見つける機会になるかもしれません。

また、各委員及び所属企業の方1名に対して海外コース及び特別コースは除くJIPA研修の無料受講特典があることも利点です。

Q 委員会としてのこだわりは？

『知財管理』誌と『季刊じば』の継続的な発行のために毎月2回の委員会において、必ず結論を出さなければならない審議事項があります。会誌広報委員会に参加することで限られた時間で多様な意見を踏まえて結論を出すこと、そのための会議の進行の難しさについても経験し、学ぶことができると思います。

専門的な情報であったとしても、情報を得る、整理するということ自体は、生成AI技術によって誰でも容易になっていきます。情報を踏まえてどのようなプロセスで結論を出すのが知財業務においてもより重要になってくると考えます。会誌広報委員を長く継続していただくことで、企画提案、進捗管理、会議進行等さまざまな役割を経験でき、そこで得るソフトスキル（企画力、調整力、判断力）が生成AI時代も求められると信じています。